

2020年度は、新型コロナウイルス感染対策への対応などにより、年間行事の中止、延期、縮小などのため、年度当初の目標を大幅に修正しながらの取り組みとなった。

1. 顧客満足の視点

(1) 面会制限への対応

新型コロナウイルス感染対策として、年間を通じほぼ面会禁止となったため、患者や家族の満足度が低下しないようにタブレット使用による面会の導入を行った。さらに院外からの入棟者制限により、退院支援カンファレンスの実施が停滞し、退院支援の質が低下しないように、WEB利用によるカンファレンス実施に切り替える工夫を行った。この結果、回復期、地域包括病床ともに例年と変わらない退院支援が実施できた。

(2) 床頭台の新規入れ替え

床頭台の新規入れ替えでは、新床頭台の機能について師長会を中心に検討し、11月に入れ替えを行った。新機能(冷蔵庫、BS対応、入院案内設置TV)付きにより、患者の反応はまずまずであった。今回、入院案内については、3月に使用開始となったため、患者、家族からの反応や入院案内のプロセス評価は次年度に実施する予定である。

(3) 接遇

看護部教育委員会を中心に毎月の接遇スローガンを掲げ、看護師、看護補助者の接遇向上を目指した。退院時のアンケートなどには、例年とあまり変わらない件数のご意見があがっており、今後も継続し、接遇向上への取り組みを行い、少しでも患者・ご家族へ配慮出来る看護ができるようにしていきたい。

2. 業務プロセスの視点

1年間を通じ、感染対策を重点的にを行いながら、業務プロセスの見直しを図った。特に、場面ごとに必要な防護具の適切な使用ができるように各部署での研修、演習を繰り返し実施した。新たな業務(発熱外来、感染者対応)についても準備を行い、行政と連携しながら職員を配置し対応した。

患者入院数、手術数の減少などもあり、業務量が一部に偏る傾向は例年に比べ多くはなかったが、応援体制を工夫することで業務負荷軽減に努めることができた。前年度後半にバイタル測定値の転送システム、血糖管理システムなどが入り、記録の転記作業が減少してきたが、感染管理対応の影響で業務量調査を実施できていない。今後は、音声入力システム活用も含め、業務改善の評価を実施して、改めて、業務内容の見直しを行っていきたい。

妊娠中の看護師数が例年より増加傾向となり、育休復帰後の短時間勤務者増加に伴い、夜勤勤務可能者数が限られたため、外来部門の応援体制、夜間救外勤務対応者として、一部夜勤業務を開始し病棟への負荷軽減を行った。

面会禁止のため、家族との連絡、洗濯物などの受け渡しなどの新たな業務の流れを作る必要があった。当初は、各病棟まで来棟してもらい、対応していたが、新型コロナウ

イルスの流行レベルにあわせ、病棟クランク、看護補助者の協力のもと1階フロアでの受け渡しに移行期間を設けて変更した。大きなトラブルなく対応している。

3. 学習と成長の視点

(1) eラーニング導入による学習環境の確保

新型コロナウイルス感染症による影響で、年間で計画した院外への出張、学会、研修会は中止、もしくは延期となり、予定したうち実際参加できたのは、WEB開催分など約3分の1であった。6月以降eラーニングを導入開始し、個人のペースで学習がすすめられる環境へ移行した。学習の進捗には個人差はあるが、産休、育休者の増加(例年の2倍)もあり、復職後の知識、スキル確認がすきま時間を利用してできるため有効活用できている。院内での集合研修もソーシャルディスタンスを確保しながら実施し、予定していた看護研究発表会は開催時期、時間などを変更し、集合の形で実施した。更に当日参加できなかったスタッフへは、院内システム上で動画を配信し各部署の成果内容を共有出来るように工夫した。制限がかかった状況の中ではあったが、システム(WEB)の活用で例年と同じように研修が実施できた。

(2) ラダーシステム再検討、マネジメントラダー導入への取り組み

前年度に引き続き、ラダー申請を推進し、マネジメントラダーの導入を行った。

研修機会が減少した影響もあり、各部署のラダー申請者数は例年の3分の1であった。今後は、申請内容などの見直しを行い、再検討していき、申請者増を図りたい。マネジメントラダーも導入したばかりのため、今後評価を進めていく予定である。

4. 財務の視点

(1) 加算算定への取り組み

①入退院支援加算取得

外来受診者数、入院患者数の減少はあったものの、入退院支援加算対象者の対応件数は前年と同等程度で推移した。感染症予防対策に配慮しながら、地域包括、回復期病棟ともに、カンファレンスの開催方法を工夫し、継続看護が必要なケースには、外来との連携強化を図る事ができた。

②病床の有効活用として、適正な病床管理への取り組み

一般、地域包括、回復期の各機能に応じ、対象患者の選定、入退院数管理により病床管理を年間通じ実施した。新型コロナウイルス感染症対応のため、限られた病床の運用を確実にを行うために医事室と協力し、患者情報、病床空床情報の共有システムを作成し病床会議で活用した。その結果、医師との情報共有が早くなり、病床運用の効率化に繋がった。この実績をもとに、包括病床運用方法を見直し、病床数を再検討し、次年度以降は、病床再編に取り組む予定である。

1. 顧客満足・財務の視点

様々な疾患・状態の患者に対応できる看護師の育成を継続課題に上げ、「看護の基本に立ち返る～感性の育成～」を部署スローガンとして取り組んだ。顧客満足では、接遇について看護部で共通の接遇スローガンを掲示し、病棟では接遇勉強会を2回/年、毎週身だしなみチェックを行った。退院時アンケートで「対応が悪いと感じた職種」の看護師は5件/年であり、前年度と同件数であった。患者・家族対応に関するご意見・指摘が数件あり、接遇改善の取り組みは今後も課題である。財務の視点では、地域包括ケア病床のサブアキュート機能の強化として、地域包括ケア病床直入対象患者を周知した。その結果、自宅からの入院患者は4月18.1%、6月以降は20%以上を維持し、平均23.9%であった。地域包括ケア病床入院患者の期限越えは12名、合計336日であり前年度から減少した。退院支援の充実では外来継続看護25件/年を目標としたが、8件/年と減少し、入退院を繰り返す患者が多く、新規依頼患者が減ったことが要因と言える。

2. 業務プロセスの視点

業務の見直しと業務シフトは随時行い、一部機能別看護を活かした役割の明確化と業務分散により、リーダー業務・ロング日勤業務の軽減を図った。リスク管理では、インシデント62件、アクシデント0件であり、転倒・転落24件、内服10件、血糖11件、点滴7件が上位であった。このうち、血糖管理システム導入に伴う血糖測定忘れなどが増加したが、対策を行ったことで、10月以降はインシデントの発生はなかった。感染管理では、擦式サニサー使用量は6,937ml/月であり目標はクリアした。新型コロナウイルス感染症対策として、スタッフ間での情報共有、手指衛生やPPE着用着脱などの標準予防策の徹底に加え、高接触面の清掃を行った。

3. 学習と成長の視点

キャリア開発ラダーでは、承認・申請者ゼロであった。2020年度よりeラーニングでの自己学習が6月より開始となったが、進捗率平均は51.47%、学習に個人差がみられた。継続課題である中堅看護師の育成において、まずは気付き(感性)の育成が重要と考えた。医療安全・感染・接遇のうち、1テーマについて各自5分間レクチャーを行い、その他入院症例における疾患、病態等の勉強会も適宜行った。業務の隙間時間を活用した症例カンファレンスを充実させ、若手・中堅看護師のアセスメント力向上に努めたい。

2020年度3病棟では、患者に寄り添い患者とともに考える看護の提供を目指し活動を行った。

高齢化、認知症患者の増加が加速する中、それに伴い入院治療により廃用症候群などで退院支援が困難になってきている事例がしばしば見受けられる。3病棟では、前年度に引き続き、多職種協働による廃用予防への取組みを重点的に行った。

入院後早期に多職種で退院支援カンファレンスを行い、入院前のADL情報や退院目標、退院困難となっている情報の共有を行った。また、その情報をもとに、定期的な離床カンファレンスや摂食嚥下等のカンファレンスで対象者のピックアップと介入内容の検討を行い、廃用予防に取り組んだ。

離床カンファレンスでは、66名/年の対象者に対し、目標の共有、介入内容の検討・評価を行った。また、包括ケア病床で行われている100歳体操への参加を促し、廃用予防だけでなく、認知症患者のケアに取り組んだ。

摂食・嚥下カンファレンスでは、38名/年の対象者に対し、管理栄養士、セラピストとともに毎週検討を行い、栄養面からのアプローチを行った。

高齢者や独居の癌や心不全などの終末期の入退院を繰り返す患者も多くなっている。終末期の患者に対しては、ACPに対する取組を行った。スタッフ教育としてビデオ学習会を中心に行い、意見交換を行った。ACPを10例の患者に実施し、患者の意思決定支援と患者に寄り添ったケアの提供ができるよう努めた。

2020年度は、新型コロナウイルスの影響を受け、感染対策を徹底していった。家族との面会が禁止となり、リモートICやオンライン面会へスイッチングし、患者・家族の不安の軽減に努めた。しかし、十分な対応ができない場面も多々あり、患者・家族からのご意見が数件あった。今後もコロナ禍でこのような状況が続く事が予測され、患者・家族の不安やストレス軽減に努めながら、更に安全・安楽に治療・療養に専念できるよう援助していく事が課題である。

退院前カンファレンスなどもオンラインで実施、情報共有を図り、他施設・多職種間の連携を維持できるように努めた。

2020年度は、人に優しく尊厳あるリハビリ看護の実践、チームで支える退院支援を目標として取り組んだ。コロナ禍での家屋調査や外出訓練など感染対策を行いながらリモートも活用し、多職種で協働する退院支援を行った。

1. 顧客満足の視点

入棟対象者に高齢者や認知症患者が増えるなか、患者の困りごと対策、安全な食事の提供、退院支援の充実を目標として取り組んだ。看護部とリハビリセラピストと共に4つのプロジェクトチームで活動を継続した。排泄プロジェクトは、排泄アセスメントから布パンツ（リハビリパンツ）への移行が80%（前年度54%）可能となった。摂食栄養管理プロジェクトは摂食機能療法に関与し、STからレクチャー後の看護師介入は、ケア実施上の注意点を共有し8名実践できた。FIMプロジェクトは軒下カンファレンスの実施率向上を重点的に取り組み、上半期57%、下半期90.6%と実施率は上昇した。また看護師が苦手としていたFIM評価の勉強会を実施し担当セラピストと共有評価することで患者のADL/IADL拡大に繋いだ。

2. 業務プロセスの視点

業務効率化により働きやすい環境づくり、また医療安全推進に取り組んだ。バイタルサイン入力や血糖測定の自動送信は定着した。しかし音声入力ツールの活用はできておらず、今後は記録効率化、時間外業務減に向けて取り組む。インシデントアクシデント件数は68例であった。内訳は転倒45例、薬剤13例、チューブ関連4例、その他6例で前年度より転倒件数が増加した。転倒対策プロジェクトはセンサーマットの検知タイミングを検討し、部署で独自にセンサーを作成し使用した。その結果、下半期は11例（上半期34例）と転倒件数は減少した。新型コロナウイルス感染症もあり、さらなる感染対策を行い、委員を中心に環境チェックと手指消毒剤使用量確認、手指衛生訓練、PPE着脱訓練を実施し啓発を行った。また、患者のリハビリや療養環境の対策を行い感染症の発症はなかった。

3. 財務の視点

年間対象入棟者数は228名、対象退院者数は225名で退院者数は前年度より5%増加した。内訳は、脳疾患39%整形外

科疾患61%であった。病床利用率は年間平均90.6%（前年度95.2%）平均患者数は36.1名（目標36名）(1) 日常生活機能評価における重症者は41.3%（前年度48.9%）(2) 日常生活機能評価4点改善率は74.2%（前年度75.7%）(3) 在宅復帰率は81.5%（前年度81.7%）(4) リハビリ実績指数は53（前年度46）であった。各要件を満たし回復期リハビリテーション病棟入院料Iを維持できた。急性期病院からの直接入院を受入れ、早く受け入れ早く良くして在宅へと退院支援を行った。病床利用率は前年度より減少したが脳卒中リハビリによる入院単価は増え収益は維持できた。

4. 学習と成長

個々のスキルアップ、研究会・学会発表を目標とした。院内看護研究では、軒下カンファレンスの実施、FIM評価実践のためセラピストと協力し、定期的に勉強会を行い患者ケアに繋いでいる。院外研修発表には至らなかった。認定看護師のレクチャーは脳疾患患者の病態をメインに学びを深める内容の教育を行った。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症対策として発熱検査外来を設置し、感染拡大防止、円滑かつ安全な診療体制の確保に努めた。また、地域包括ケアシステムに対応すべく、独居、老老介護、認知症高齢者の激増、慢性疾患の患者に対して治し支える生活支援医療をめざした。特に、外来看護の役割の一つである継続看護の充実を目標に、病棟、在宅と連携し取り組んだ。また、地域医療支援として、訪問診療同行継続、新たに松合医院巡回診療同行を開始した。一般・救急外来、内視鏡室、健診センター、手術室の各セクション間の連携を強化し応援体制の整備を進めた。(2020年一日平均外来患者数144.2人、救急車搬送数718人、外来化学療法件数89件、入退院支援加算51件)

1. 外来における入退院支援・継続看護の取り組みと訪問診療・巡回診療同行の実践

2019年度より内視鏡検査後の組織検査結果説明時に、不安軽減を図る目的で看護師が同席し、継続看護につなぐ体制を維持した。対象患者は23名で、全員への説明時に同席し、その中で7名に継続看護が必要と判断し、介入を実施した。また、入退院支援加算への対応では、加算対象60名には確実な実施ができた。加算の対象外となる150名に対しても、入院中の治療検査の説明、入院生活説明、持参薬確認、褥瘡・栄養スクリーニングなどを実施し病棟と連携した。また、退院後の継続看護実施件数は46例と昨年より減少したが、うち9例(19%)は外来・連携室から継続看護として介入することができた。訪問診療は、担当医師5名で、新規患者14名、訪問診療総件数は181件、事前採血訪問は12件実施。訪問診療終了者16名は、死亡10名、施設入所4名、その他2名であり、がんターミナル期患者2名については、訪問看護師協力のもと在宅看取りを行った。前年度末より開始された巡回診療については、対応スタッフ1名配置し、のべ53件同行診療ができ、オンライン診療への取り組みを計画している。

2. 内視鏡における患者安全への取り組み

看護師2名、看護補助者1名体制。2020年は上部内視鏡1,441件、下部内視鏡570件であった。新型コロナウイルス感染予防対策で検査の制限もあり、上部・下部内視鏡件数、健診部門もすべて2割程度減数であった。咽頭麻酔方法の変更など飛沫感染対策を実施し、内視鏡検査における感染予防に努め

た。

3. 手術室における看護・業務改善の実施

看護師2.5名体制。手術総件数は116件で、前年より34件減少。術前訪問実施率は85%、短期滞在入院患者の術後訪問を退院後の初回外来時に実施することを計画し、76%の対象者に実施できた。さらなる術後訪問実施率向上のため、記録の充実を目指し、テンプレートを作成し、システム再構築中である。今後もより一層患者安全、患者満足、外来から継続したケアの実践を意識しながら、対応看護師育成に努めたい。

4. 健診者数増による更なる健診センターの充実

看護師2名体制。前年度に引き続き胃がんリスク検診では66件申し込みがあり、異常が発見されたのは18件であった。2020年度は、新たに骨密度・体組成のみのオプションを設置し、55件中、12件が要精密検査、15件が要経過観察であった。また、健診後の受診勧奨が課題であったことより、対象者の未受診理由にあわせた介入を継続した。